

病害虫発生予察情報（2月予報）

平成29年1月25日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率0.9%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並(±)
	灰色かび病	発生量：やや多 (発病株率0.9%)	1月中旬発生量：やや多(＋) 気象予報：気温：並～低い(±) 降水量：並(±)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率1.2%)	1月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：並～低い(±)
	ハダニ類	発生量：少 (寄生株率16.1%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (寄生株率3.5%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(±)
トマト	灰色かび病	発生量：少 (発病株率4.7%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並(±)
	葉かび病 すすかび病	発生量：少 (発病株率17.5%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並(±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率2.4%) タバココナジラミ発生量：少 (寄生株率2.5%)	1月中旬発生量 黄化葉巻病：やや少(－) コナジラミ類：少(－) 気象予報：気温：並～低い(－)
タマネギ	腐敗病	発生量：やや少 (発病株率0.6%)	1月中旬発生量：少(－) 防除員からの情報：やや多(＋) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並(±)
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率0.04%)	1月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：降水量：並(±)
	ネギアザミウマ	発生量：並 (寄生株率54.9%)	1月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並(±)
レタス (非結球レタスを除く)	べと病	発生量：少 (発病株率1.7%)	1月中旬発生量： 少(発生なし)(－) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並(±)
	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率3.1%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並～低い(－) 降水量：並(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県)の過去10年間との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県)の過去10年間との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【イチゴ】

＜生育の概況＞

生育は、平年並～やや遅い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、県全体の平均発病株率は0.2%（平年1.0%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並で、本病の発生を特に助長しない。ただし、発生が多い時期のため注意する。

防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌が出現しないようにローテーション散布する。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除く。
- ・今後は果実での発生が多くなるので、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、発病株率は0.9%（平年0.5%）と平年よりやや多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並で、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最低限にするなど）。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌が出現しないようにローテーション散布する。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ハウス外の土中深く（地下50 cm以上）に埋めるなどして適切に処分する。
- ・朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.4%（平年1.5%）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並～低く、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・発生に注意し初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・天敵を利用している場合は、アブラムシのマミーの発生状況をよく観察する。
- ・アブラムシ類が多発した場合は、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率9.4%（平年16.4%）と平年より少ない発生であった。天敵を放飼している圃場では、天敵が観察された。
- ・1か月予報では、気温は平年並～低く、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。なお、ハダニの発生している株が点在している場合は、発生株周辺にスポット散布するなど、迅速に対応する（農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤や天敵を利用する。また、物理的防除剤は卵への効果が低く、残効性が期待できないため、5日前後の間隔で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類、天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。
- ・ハダニ類が多発した場合は、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、県平均寄生株率0.2%（平年2.4%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並～低く、本種の発生を特に助長しない。ただし、2月中下旬以降に発生が多くなるため注意する。

防除対策

- ・アザミウマ類は花を好むため、花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発生するほ場では、開花初期に防除を徹底する。
- ・ハダニ類とアブラムシ類の天敵を利用している場合は、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響のない薬剤を選択し散布する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い状況である。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.1%（平年3.8%）と平年より少ない発生であった。
- ・本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。

- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率1.6%（平年21.5%）と平年より少ない発生であった。
- ・本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。
1か月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率1.9%（平年2.6%）と平年よりやや少ない発生であった。
- ・コナジラミ類は、平均寄生株率1.2%（平年3.3%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並～低いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【タマネギ】

<生育の概況>

生育は平年より約10日進んでいる。

●腐敗病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率 0.4%（平年 2.9%）と平年よりも少なかった。但し、防除員からの情報では、やや多いとの報告がある。
- ・ 本病は、凍霜害や強風雨、ネギアザミウマの食害等による傷口部から感染しやすく、気温が高いと感染・発病が助長される。1か月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並のため特には本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 傷んだ葉がある場合は、降雨の直前に予防散布を行う。また、ネギアザミウマの発生に注意し、本虫の防除を実施する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では発生は確認されなかった（平年平均発病株率 0.04%）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状が現れることがあり（ボトリチス葉枯症）、ボトリチス葉枯症の平均発病株率は 0.6%（平年 0.6%）と平年並だった。
- ・ 本病は多雨で発生が助長されるが、1か月予報では降水量は平年並のため、特には助長しない。

防除対策

- ・ 降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。薬剤の選択に当たっては病虫害防除基準（URL: <http://www.s-boujo.jp/>）を参照する。
- ・ 被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 47.0%（平年 53.7%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並だが、気温は平年並～低く、本種の増殖を助長しない。

防除対策

- ・ 例年、2月中旬以降気温が高くなると増殖が盛んになり、寄生密度が高まる。このため、密度が高まる前に防除を実施する。成幼虫ともに株元の葉と葉の間隙に多く寄生しているため、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年並～早い状況である。

●べと病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率 2.1%）。

- ・病原菌の生育適温 10～15℃で、多湿を好む。1 か月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・1 月中旬の巡回調査では、平均発病株率 0.1%（平年 2.6%）と平年より少ない発生であった。
- ・トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる。1 か月予報では、気温は平年並～低く、降水量は平年並のため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌数を減らすことが大切である。
- ・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル被覆後は、トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

1 月中旬の巡回調査では、平均発病株率 1.6%（平年 1.8%）と平年並の発生であった。本病は土壤中に生息する菌によって媒介される土壤伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壤中のウイルス保毒菌を少なくするように心がける。

【チャ】

<その他の病害虫>

●赤焼病

病原菌は細菌である。本病は寒害、霜害によって発生が助長される。幼木園や、つゆひかり、おくひかりなどの品種は特に注意する。初発を確認したら速やかに銅を含む殺菌剤を散布し、その後発生状況をみながら追加防除する。

●チャトゲコナジラミ

チャトゲコナジラミの発生が確認されている茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を対象に防除を行う。幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くようにていねいに散布する。マシン油乳剤を散布すると赤焼病の発生を助長するので、赤焼病の発生が心配される茶園では、マシン油乳剤の1 週間前までに、銅を含む殺菌剤を散布する（マシン油乳剤との混用散布は、殺菌剤の効果を著しく低下させるため行わない）。

3 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成29年1月19日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月21日から2月20日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	40	40	20
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	30	30	40
1週目	気温	40	40	20
2週目	気温	20	40	40
3～4週目	気温	40	40	20

【予報の対象期間】

1か月 : 1月21日(土)～2月20日(月)

1週目 : 1月21日(土)～1月27日(金)

2週目 : 1月28日(土)～2月3日(金)

3～4週目 : 2月4日(土)～2月17日(金)

(2) 3か月予報（東海地方 平成 29 年 1 月 25 日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 2 月から 4 月

【予想される向こう 3 か月の天候】

向こう 3 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。
この期間の降水量は、平年並または少ない確率ともに 40% です。

2 月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。

3 月 天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。

4 月 天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

【気 温】

3 か月			2 月			3 月			4 月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
30	40	30	30	40	30	30	40	30	30	30	40

【降水量】

3 か月			2 月			3 月			4 月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
40	40	20	40	30	30	40	30	30	40	30	30

※参考資料

【静岡県の平年値（1981 年～2010 年）】

	平均気温（℃）			降水量（mm）		
	2 月	3 月	4 月	2 月	3 月	4 月
浜松	6.5	9.7	14.7	78	149	168
静岡	7.3	10.3	14.9	103	217	210
三島	6.3	9.5	14.4	88	164	149

*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※季節予報利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」 「高い（多い）」の 3 つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010 年の 30 年間における各階級の出現率が等分（それぞれ 33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の 2 分の 1 より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--